

障害者スポーツ推進プロジェクト

～地域の課題に対応した障害者スポーツの実施環境の整備事業～

報告会資料

2021年2月17日（水）

弘前大学教育学部附属特別支援学校

担当 中嶋実樹

miki-04@hirosaki-u.ac.jp

2019年度の課題

スポーツを通じた共生社会の実現

弘前大学モデルの拡張

～特別支援学校発のインクルーシブスポーツ教室の開催～

【課題と方向性】

・ **幼児期の身体運動の必要性**

⇒生涯スポーツに繋げるために、幼児期から行える活動の提供

「運動を調整する能力」が著しく向上する幼児期に、対象を広げ取組を提供する。

・ **インクルーシブスポーツの活動場所の検討、普及活動**

⇒特別支援学校を会場に実施した結果、健常児の参加が少なかった。活動場所を小学校に広げる。
活動の共通理解。

障害者スポーツの地域格差を解消

ICT機器を活用したサテライト大会の同時開催

【課題と方向性】

・ **競技スポーツを通して、同年代の人との交流**

⇒高い目標設定、意欲の向上

⇒他県の選手との競技スポーツを通じた交流

・ **ICT機器を通じたスポーツイベントへの参加**

⇒遠方からの参加を可能にしたイベント開催

2020年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

【事業趣旨】

- ・ 特別支援学校がコーディネーターとなり、地域に根ざしたインクルーシブスポーツ活動の構築を目指し、地域総合型スポーツクラブや地域のスポーツ施設との連携をより強化して、地域のスポーツ施設や人材を有効活用し、**インクルーシブスポーツの普及と拡大を図るための環境整備**に取り組む。
- ・ 生涯を通じたスポーツ活動に繋げるために、幼児期の取組の大切さを見出した。「幼児期に運動を調整する能力を高めておくことは、児童期以降の運動機能の基礎を形成するという重要な意味を持っている。」また、「幼児にとって体を動かす遊びなど、思い切り伸び伸びと動くことは、健やかな心の育ちも促す効果がある。また、遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲や有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるとともに、何事にも意欲的に取り組む態度を養う。」（文部科学省「幼児期運動指針」）と明記されていることを踏まえ、**幼児期の身体活動の場を提供する「きっずパークとみ〜の」環境整備**を図る。
- ・ **地域格差を解消するスポーツイベント**として、ICT機器を活用した遠隔地からのサテライト交流大会を継続開催。

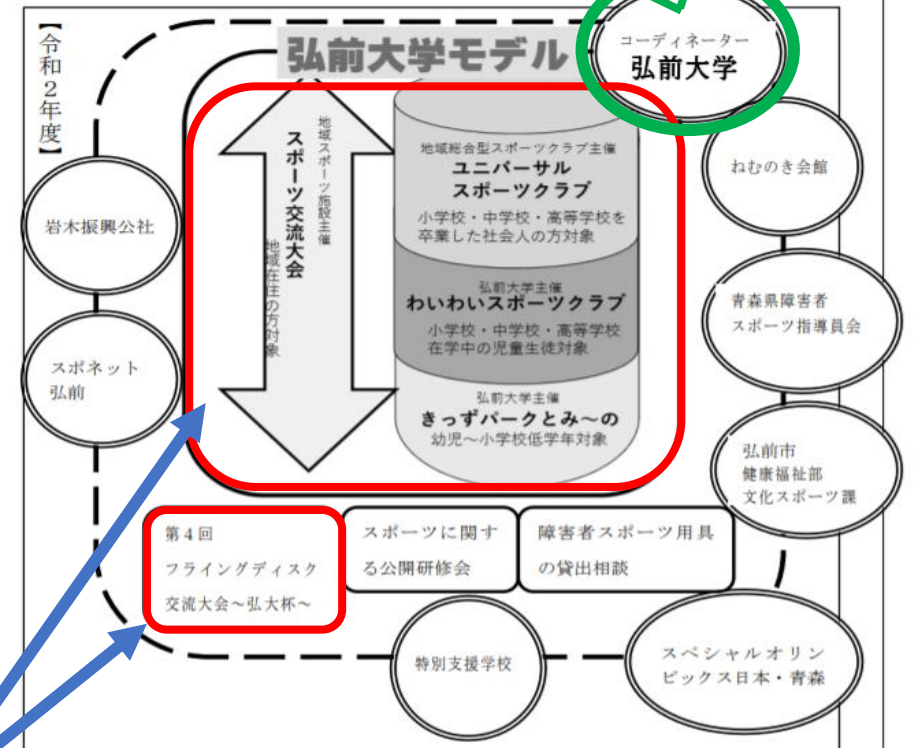


インクルーシブスポーツを通じた共生社会の実現

【コーディネーターとして】

①リーフレット 作成・配布

②関係機関との連携



スポーツを通じた共生社会の実現

弘前大学モデルの拡張
～特別支援学校発の
インクルーシブスポーツ教室の開催～

幼児期 『きっずパークとみ～の』

実施期日・人数 9月 5日：17人
 9月19日：18人
 10月 3日：24人
※実施予定10回 コロナ感染防止のため7回中止
支援員：学生（特別支援教育専攻） 3人

インクルーシブスポーツ 『わいわいスポーツクラブ』

実施期日・人数 9月 5日： 7人
場所 9月19日：10人
 10月 3日：18人
※実施予定10回 コロナ感染防止のため7回中止



スポーツを通じた共生社会の実現

スポーツ公開研修会

テーマ：「幼児期の身体運動の大切さ」

講師：時本 英知氏

(新潟青陵大学短期大学部幼児教育学科 准教授)

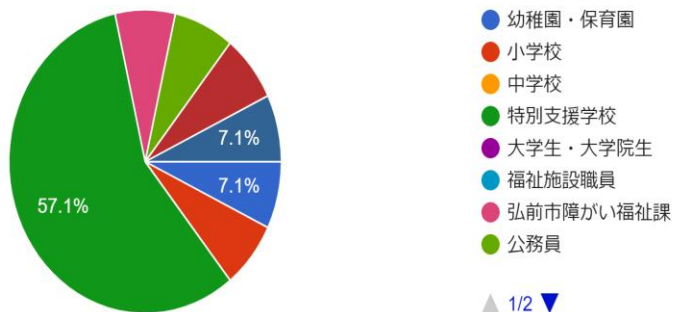
期日：令和3年1月29日(金)

参加者：38名



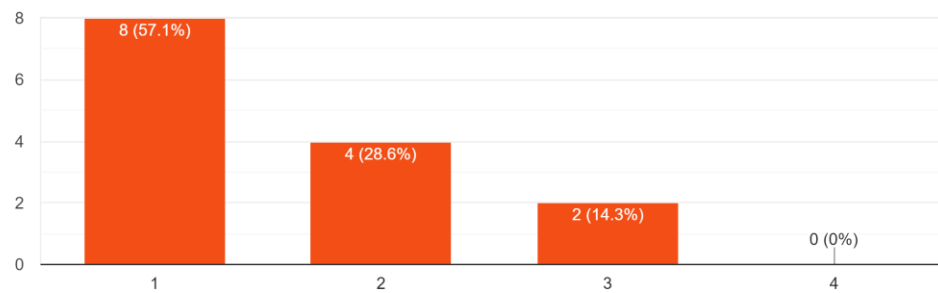
Q1. 所属について

14件の回答



Q2. 本日の内容は、日々の取組の参考になりましたか

14件の回答



1 とても参考になった ~ 4 参考にならなかった

【幼児期の身体運動について地域でどのような活動があれば良いか】

- ・ 大きな遊具を使ってのダイナミックな活動
- ・ 今回のような事例を種々取り入れた体操教室
- ・ 地域で行われているさまざまな活動に、障がいのあるなしに関わらず参加できる環境
- ・ 地域での運動会のようなイベントがあり、学校も参加するような活動が復活すれば、老若男女・障がいの有無を問わず参加でき、幼児へも自然体験を含んだもの休日の校庭の開放など子どもが集まり、のびのびと身体を動かして遊べる環境
- ・ 鬼ごっこやダンス、球技などいろいろな選択枝があり、運動が得意な人も不得意な人が気軽に、親子で楽しめるような活動
- ・ 保育所、こども園が積極的に身体運動できる環境
- ・ 各保育所等に「体育の先生（指導員）」を配置又は指導者研修会
- ・ 障害の有無に関係なく、自由に遊びに行ける場所
- ・ 障がいのある子どもも参加できる運動サークル

障害者スポーツの地域格差を解消

ICT機器を活用したサテライト大会の同時開催

★第4回フライングディスク交流大会～弘大杯～

期 日：令和2年12月20日（日）

参加者：青森県20名 福島県13名 岩手県5名

【参加者の声】

青森県

- ・いつもと同じ環境で、全国レベルの人と競技することができた。移動時間がなくて良い。参加しやすい。

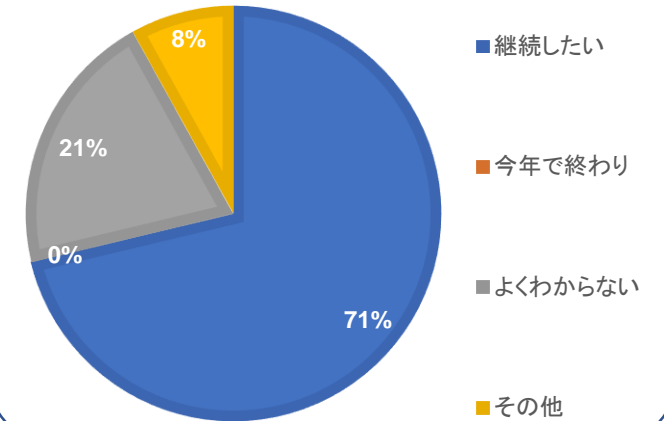
岩手県

- ・新型コロナウイルス感染症拡大防止に伴い、活動が制限される中、ICT機器を通して、競技審判ができる機会がもらえたことが嬉しかった。こんなことできるんだ～。

福島県

- ・交通の便が悪く、いろいろな人と交流することが難しかったが、ICT機器を通して、県内外の選手とフライングディスク競技ができて嬉しかった。
- ・新型コロナウイルス感染症で、なかなか交流ができない中、ICT機器を通じて他県の選手と交流ができ、競技しているときの参加者の笑顔を見れてほっとした。
- ・県内では、いつも優勝していた。近くにライバルがいなかった。でもICT機器を通して、全国大会に出ている人と競技することができた。負けて悔しかったからもっと練習しようと思った。意欲の向上に繋がった。

今後の方向性



スポーツを通じた共生社会の実現

【成果】

- ・「わいわいスポーツクラブ」を弘前市行政と共催で開催 ⇒ 弘前市の施設をスムーズに借用が可能
- ・弘前市の掲示板に情報を掲載 ⇒ 情報発信の拡大
- ・「きっずパークとみ～の」の需要が高く、必要性を感じた。

【課題】

- ・新型コロナ感染拡大防止のため、集まったの活動が難しい ⇒ ICT機器を活用したプログラムの検討

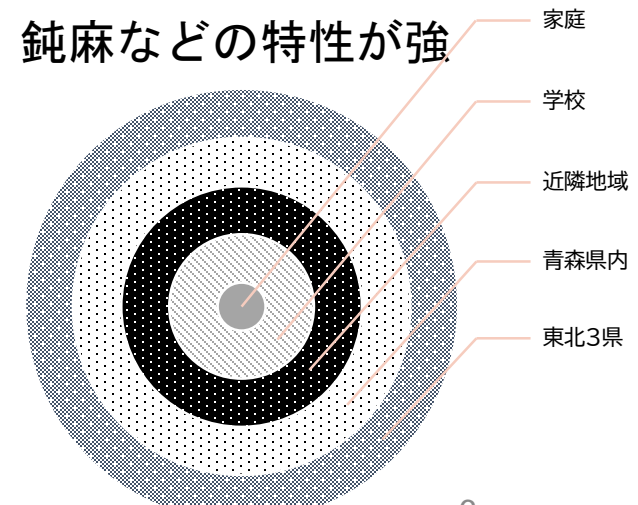
障害者スポーツの地域格差を解消

【成果】

- ・知的障害や発達障害があることにより、慣れない場所への適応困難や感覚の過敏・鈍麻などの特性が強
- ・く個別的対応が欠かせない参加者であっても、普段取り組んでいる環境を大きく変えずに競技でき、負担を小さくしつつも自分らしさを発揮した活動参加につながった。
- ・コロナ禍での、障害者スポーツの経験や他児との交流機会を保障させることができる新たな活動の可能性が見えた。

【課題】

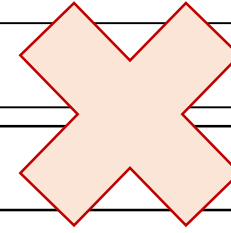
- ・オンライン実施に向けて扱える職員が少なく負担となっており、誰でも扱える環境設定やICT機器の研修の必要性を感じている。



2020年度 障害者スポーツ推進プロジェクト

コロナ禍で予定していた活動が実施できない

「わいわいスポーツクラブ」集まってのスポーツ教室



活動変更申請

【オンラインスポーツ教室】

- ・バーチャルリアリティーゴーグルの活用
- ・オンラインインクルーシブスポーツ教室【2月末予定】

【バーチャルリアリティーゴーグルの活用】

期 日：令和3年1月

試行

実施対象：附属特別支援学校中学部1年生

場 所：教室

実施種目：バレーボール

実施内容：バレーボールの映像体験

Vリーガーのスパイクをレシーブできるか!? 体験入部編

- 生徒の声：
- ・VR初めてつけてみましたが、動画とちがって本当に体育館にいる感じでした。プロのスパイクがはやかったです。
 - ・VRをやってみて、ちょっとむずかしかったです。バレーボールのボールが速すぎて、レシーブがむずかしかったです。
 - ・頭にかぶってみたら急に別世界に入り込んでびっくりしました。YouTubeでいっぱい人が出てきて、バレーのやり方を教えてくれたけど、あまり動けませんでした。でも声が大きくて聞こえやすかったです。



- ・今後、サテライト大会を増やす予定はあるか。増やすのであれば岩手県がよい。全スポを開催し、スポーツ協会も活発、スポンサーも多い。



フライングディスク交流大会～弘大杯～では、岩手県を加えた東北3県で実施した。

- ・共生社会ホストタウンとして障害者スポーツの推進を共同で行うことは、弘前市として利益になる。地域の体育施設を借用も一般の抽選方式ではなく、スムーズに利用可能となる。



「わいわいスポーツクラブ」共催で開催した。弘前市民体育館を利用できた。

- ・開催曜日は、就労支援があることから日曜日に開催すると人が集まるかも。
- ・ねむのき会館では、陸上は月2回、日曜日に開催している。日曜開催のほうが参加者が増えるだろう。



今年度は、うまく調整できなかった。次年度以降調整したい。

- ・コロナ禍でICT機器を使って、ギガスクール構想を活用し、すぐにはできなくても長期的にそれに頼っていくことも必要だろう。



事業申請変更をかけて、オンラインスポーツ教室を試行。

- ・本校は重度の子が多く、周知は参加できそうな子に限られている。医療的ケアの必要な子に看護師を配置すれば、参加者も増えるだろう。
- ・ユニバーサルスポーツにユニホックがあるが、通常の子がやってもおもしろい。小・中学校の体育の先生方に講習会をやって周知してはどうか。中教研の競技の講習会に出向いて講習するのも一つである。また、まず支援学級の子が体験し、通常学級の子とのつながりのなかで広げていければよい。



会場に集まることが難しい方には、VRゴーグルを使用した、視聴体験やオンラインスポーツ大会の方が参加の可能性が高くなると予想する。次年度、取り組みたい。

- ・県内で支援学校間のつながりをつけていけば、文科省も予算をつけてくれるだろう。ギガスクールの一環として、リモートで行うことも一つだろう。移動手段の制約やコロナの制約はあるが、少しずつつながりをつけていくことも一つの方法だろう。



次年度、オンラインを中心にプログラムを検討していきたい。